

日本の伝統・文化を継承する若者たち

# 明日への扉

Door to Tomorrow



Tatsuya Arai

1982年東京都生まれ。無形文化財選定保存技術保持者である長澤氏春氏に師事。2005年、福井県で行われた新作能面公募展に出品した「万端」で、文部科学大臣奨励賞を22歳の若さで受賞した。



能面(のうめん)

原型となっているもののほとんどが桃山期までに完成したといわれ、これらが「本面」として現代まで、代々「写し」により継承されている。中でも神聖視された演目で使われる「翁面」は、昔、神が老人の姿で舞った姿を表し、能面の中では最も古いとされている。

日本の伝統・文化を継承する若者たちを紹介する映像ドキュメンタリー「明日への扉」をぜひご覧ください。

MOVIE

WebやTVなどでお楽しみいただけます。

Web版

パソコンやタブレットでご覧になれます。

アットホーム明日への扉

検索

TV番組

ディスカバリーチャンネル(CS)

冠番組

「アットホーム presents 明日への扉」放映中  
毎週金曜日 22:53~23:00

NEW!!

最新号のご案内 好評公開中

No.046 / 土佐典具帖紙職人 濱田 洋直 氏

## 面打師

新井 達矢 氏

全身全霊を注ぎ、  
聖徳太子作の「面」を写す。

幽玄の美で世界を魅了する、日本古来の舞台芸術、能楽。その能楽に欠かせないのが、一見無表情のようでありながら、わずかな動きや光の具合で喜び、悲しみ、怒りなどを表す能面だ。面打師とは、この能面や狂言面といった「面」をつくる職人を指す。

新井達矢さんは伝統の技を受け継ぎ、日々腕を磨いている若き面打師。彼が初めて面を打ったのは、なんと6歳の時だという。

きっかけは？

新井「お祭りで着けたお面に興味を抱いたのがそもそものきっかけです。ヒーロー物のキャラクターより、おかめやひよつとこのお面を買ってもらって喜んでいましたね」

幼いころから面打ちの大家である長澤氏春氏に師事し、学業と両立し

ながら研鑽を積んでいたが、20歳の時に師匠が他界。新井さんはその遺志に報いるように、全国規模の公募展で、最高賞の「文部科学大臣奨励賞」を史上最年少の22歳で受賞という快挙を成し遂げた。

それからさらに腕を上げ、一世一代ともいえるべき面打ちに挑んだ。シテ方五流(主役を演じる能楽師の流派)の中で最古とされる金春流八十年代目宗家からの直々の依頼。その依頼は聖徳太子作と伝わる翁面「白式尉」の写し。古式ゆかしい式能でも、ひとさわ神聖な演目で使用する面を、現物を基につくるという大仕事だ。

ヒノキの角材にナタとノミを振るい、翁の顔立ちを整える。そして、皺の一本一本まで丁寧に彫り込んだ顔に胡粉の塗りを重ね、古色やキズを施し、悠久の時を経た趣を再現する。

特別な思いを胸に、数カ月掛けてつくり上げた面は国立能楽堂の檜舞台

で披露された。それは、持てる力の全てを注いだ面に、魂が吹き込まれた瞬間だった。

理想の職人像は？

新井「古典から学んだことを尊重し、自分なりの感性や解釈を創作に生かす。いずれは、そんな面打ちができる職人になりたいと思っています」

宗家に認められた会心の作は、次なる道の始まりとなったに違いない。そして、平成生まれの面は金春流の新しい顔として、代々受け継がれていくことだろう。明日への扉を開け、また一歩、夢に近づく。

※2010年3月取材。掲載内容は取材当時のものです。

MOVIE MORE!!  
幼いころから面を愛してきた姿を動画で詳しくご紹介しています。ぜひご覧ください。